

# 宗教心理学研究会ニューズレター

第15号 2011.12.15

## 宗教心理学研究会

*Society for the study of psychology of religion*

### 目次

公開シンポジウム報告	報告 中尾将大	1
宗教心理学研究会のフコロ具合	Masami Takahashi	10
何をスピリチュアリティと呼ぶべきかという問いはどのような場面で成り立つか？		
ー公開シンポジウムの感想	荒川 歩	11
スピリチュアリティと仏教者について	菅原研州	12
公開シンポジウムの感想からースピリチュアリティの定義についてー	小林正樹	14
公開シンポジウムに参加して	武田正文	15
日本版スピリチュアリティを考える	永野将司	16
公開シンポジウムをめぐる出席とその印象	スティグ・リンドバーク	17
事務局からのお知らせ		19

## 公開シンポジウム報告

報告 中尾将大(大阪大谷大学)

### はじめに

2011年6月11日に白百合女子大学で「現代のスピリチュアリティを斬る:スピリチュアリティに関する心理学的考察ー若手研究者の「宗教とスピリチュアリティ」討論会ー」と題して、公開シンポジウムが開催されました。報告者はコメントターの一人として参加しました。当初、コメントターを仰せつかった時は「なぜスピリチュアリティ研究が専門でない私が？」と思い、躊躇しておりましたが、事務局の松島公望さまから「講演者のお話を聞いて、日頃、中尾さんがスピリチュアリティについて感じておられること、考えておられることを自由に述べていただけるだけでいいですから」と背中を押していただき、僭越ながら、登壇させ

ていただきました。そして、私が近年、情熱を傾けて取り組んでまいりました宗教心理学、仏教心理学の研究の歩みから、思い描いてきた「スピリチュアリティ」ということについて、つたないコメントをさせていただきました。

ご講演および質疑応答を終えて、正直な感想としては「難しかったなー」ということです。なぜなら、フロアも含めて色々な分野の方がおられ、それぞれの立場からスピリチュアリティとは何ぞや、定義はこれでどうだ、という状態にして、まさに「百花繚乱」といった様相を呈していたからに他なりません。この分野の研究は「まさにこれから」ではないかと思いました。まずは、それぞれの専門分野からのデータの蓄積が待たれなければ

ならないと思います。私は、このたびの Masami Takahashi 先生のご講演はその魁になるのではないかと思いました。最初に Takahashi 先生のご講演の内容主旨についてご報告申し上げるのですが、先生は講演の前に「近年、スピリチュアリティおよびその研究について金石混合といった状態なので、これから交通整理を行う必要があるのではないか」という主旨のことを仰っていました。先生の投げかけがきつとその動きを促していくものと思います。報告者の理解の行き届かない点が多々あるかと思いますが、平にお許しください。

### 1. Masami Takahashi 先生(ノースイースタン大学心理学部)のご講演主旨

#### ①演題:「スピリチュアリティに関する心理学的考察」

現代社会において「スピリチュアリティ」という言葉をよく耳にするようになりました。しかし、本当に全ての人がその意味をよく理解した上でその言葉を使用しているのかといえば、至極疑問ではないでしょうか。例として、「スピリチュアルカウンセラー」、「スピリチュアル・ケア」、「スピリチュアル占い」、「あなたのスピリチュアルカラー」など、日常生活においてよく眼にすることでしょう。Takahashi 先生の個人的体験談でしたが、東京浅草界隈をのぞくと、「スピリチュアルカウンセリング」という看板を上げているところが目立つようになったそうです。しかし、その実体は「占いによる人生相談」なども多く含まれているとのことでした。また、このような事態を迎えた原因の一つとして、テレビ番組などの影響である特定の人物がカタカナの「スピリチュアル」という言葉を使用するようになったから広く一般的になったのではないかと推察されます。事実、「スピリチュアル」というキーワードを入力して、インターネットで検索を行うと、その特定の人物の名前や番組名が出てくることが多いそうです。

それはそれで、社会現象としての事実ですが、その弊害もあると考えられます。それは、①スピリチュアルなものとしてでないものの区別がなくなってきた、②「スピリチュアリティ」という言葉だけが独り歩きし、内実を伴っていな

い、③「スピリチュアリティ」の概念理解などの議論や基礎研究が行われなため、「スピリチュアリティ」の社会への応用、有効活用が十分でないなどが挙げられるでしょう。そこで、Takahashi 先生は心理学の立場から「スピリチュアリティ」の概念について議論し、「交通整理」を行うことが必要であると呼びかけられていました。

#### ②現代のスピリチュアリティ研究の実態

Takahashi 先生は 1983 年～ 2003 年のジャーナル文献、約 300 をデータベースとした研究を紹介され、その 1/3 は終末医療に代表される応用臨床研究であり、過去に 10 本の文献のみがスピリチュアリティの概念研究であることを明らかにされていました。

そして、スピリチュアリティの研究分野は比較的新しい分野ながら、過去 20 年に著しく成長していると述べられました。また、社会科学の分野では(特に日本において)基礎研究を怠り、応用研究が先走りする傾向があり、さらに日米両国でスピリチュアリティと宗教を明白に区別している研究は非常に少なかったことを報告されていました。

#### ③日米3世代の「スピリチュアリティ」に関する実証研究

そして、表記のスピリチュアリティに関する実証的研究を紹介されました。詳細は省いて要点のみの報告とさせていただきます。以下のキーワードの評価を日米の若年、中年、老年の 3 世代で行っていました。「宗教的である」「信念のある」「思いやりがある」「生き甲斐がある」「超越的である」「智慧がある」「苦難の経験がある」「知識がある」

その結果、日本では世代間においてキーワードの総体的な解釈が一定でない、特に、高齢者が「精神的な・霊的な」と「宗教的」を差別化する傾向がありました。この解釈の一つとして、戦時中の宗教と精神性を同一視する傾向への反発ではないかとのべられました。一方、米国においては、「精神的な・霊的な」、「宗教的」、「信念がある」が世代間を問わず、近い意味と認識されました。また、全てのキーワードの総体的な解釈が世代間で一定であることも明らかとなっていま

す。

#### ④「スピリチュアルな人」と「そうでない人」の評価

また、これも実証的研究の一端でしたが、アメリカおよび日本でスピリチュアルな人とそうでない人にはどのような人があげられるのか、そしてどのように評価しているのかを調査したところ、以下のような人物と結果が出たそうです。①スピリチュアルな人・・・ネルソンマンデラ、マザーテレサ、マハトマ・ガンジー、ヨハネパウロ2世 ②スピリチュアルでない人・・・アドルフ・ヒットラー、ビル・クリントン、麻原彰晃、サダム・フセイン、余談ですが、日本では「明石家さんま」さんも②に含まれていたそうです。結果として、日本のサンプルでは、高齢者層は若年層に比べ、これらの人々を上記の区分どおりに評価する傾向がありました。一方、アメリカのサンプルは全ての世代で、日本のサンプルに比べてこれらの人々を区分の通りに評価する傾向がありました。

#### ⑤今後の展望

今後の展望として Takahashi 先生は以下の点について言及されていました。①基礎研究の強化、②文化・年齢層での解釈の違い、③民族内での偏見、④作業定義の明言化、⑤概念研究の継続と包括的な定義の確立。

Takahashi 先生は当日、ご自身の講演がスピリチュアリティ研究の議論の「種」となり、自分は言わば、「火付け役」になればいいと述べておられました。最後は先生のこの意図に沿い、あえて報告者はこの点についての解説や感想はひかえたいと思います。読者のみなさまはこれらの点についてどのようにお考えですか。あるいはどのように感じておられるでしょうか。宗教心理学研究会の仲間同士、あるいはその他の研究のお仲間とご一緒に大いに議論を展開していただければ幸いです。

## 2. 3名のコメントーターによるコメント

ご講演の後、報告者を含む3名のコメントーターによるコメントがなされました。ここではコメントをされた順番にその「要旨」と「様子」をご報告したいと思います。

### 2-1. 荒川 歩先生(武蔵野美術大学)のコメント

Takahashi 先生のご講演はずいぶん内容の濃いものでしたので、会場は「知恵熱」が出るのではないと思われるくらい、熱気と重圧感に包まれていました。その状態を破ったのは、荒川先生の親しみやすいキャラクターとお優しいしゃべり口調でした。先生はフロアの方を任意で選ばれ、「スピリチュアリティ」と聞いてどんな印象を持ちますかと、インタビュー形式で問われていました。このやり方で、会場は一気になごやかな雰囲気になりました。「心理学者らしいやり方だな」と思いました。やはり一般の方にはスピリチュアリティの概念は難しいとの一致から先生はご自身の見解をわかりやすく投げかけられていました。

#### ①「スピリチュアリティ」の概念定義に先立って

先生は例えば、「スピリチュアル・ケア」という言葉ひとつを考えても違和感があると言われていました。というのも、「研究の側からの概念」と「日常の側からの概念」があり、それぞれが循環して使用されているという事実があるからです。「スピリチュアリティ」にまつわることで皆が幸せになればそれはそれでいいのかもしれないが、それらの何が人々に幸福をもたらし、何がリスクやコストを与えるのかという点を整理しておく必要があるのではないかと。そういう意味で「スピリチュアリティ」の概念の整理は必要と思われます。心理学において「血液型性格判断」というものがありますが、これについても心理学者はその功罪を整理してきましたが、「スピリチュアリティ」に関しても同様な作業が必要と例えておられました。

また、心理学では、日常概念を取り扱うことが多いが、物理学の世界のように「サイエンスコミュニケーター」のような存在が必要ではないかと投げかけられていました。つまり、サイエンスコミュニケーターは研究の概念と日常の概念をつなげていくという仕事をするのですが、心理学においても「スピリチュアリティ」の研究概念と日常概念をつなげていくようなサイエンスコミュニケーターの成熟を待つ必要があるのかもしれない。

#### ②心理学と「スピリチュアリティ」—精神物理学が教えてくれること—

さらに、そもそもなぜ、心理学において「スピリ

チュアリティ」の研究がされるようになったのかと言えば、ウェーバー・フェヒナーの法則と呼ばれる物理量と心理量との関数が考案されたことが一翼を荷っていたといいます。この関数の生みの親の一人で、精神物理学者のフェヒナーは霊的なものに興味を持っていたそうです。そして、物理量と心理量の中の「ズレ」を霊的なものとして証明しようとしていたと言われていました。この観点からすると、先生は、「心理学は霊的なものをあつかう学問」という見方もできるのではないかと語っておられました。そして、霊的なものを証明しようとしていたウェーバー・フェヒナーの法則がスピリチュアリティの定義を行う上で参考になるかもしれないと仰っていました。どうということかという、物理量と心理量の「ズレ」こそが「スピリチュアリティ」ではないかと先生は考えておられるようです。スピリチュアルの具体例として先生は「ディズニーランド」を挙げておられました。つまり、ディズニーランドはスタッフが安い賃金(物理量)でみんなが幸せ(心理量)になれる場所だといえます。乏しい物理量と豊かな心理量の「ズレ」が「スピリチュアル」ということになるというわけです。

先生は、同じ観点から Takahashi 先生のご講演の中にあつた「スピリチュアルな人」と「スピリチュアルでない人」を鑑みても、同じ理屈で説明されていました。「スピリチュアルでない人」を例にとられていましたが、彼らは絶大な権力や金銭(物理量)と幸せ(心理量)を一致させようとするので、両者にズレが生じない。よってスピリチュアルとはいえない人になるのではないかと語っておられました。

### ③今後の「スピリチュアリティ」の概念構築に向けて

以上からスピリチュアリティの定義というものを考えると、なかなか難しいのではないかということになるでしょう。その理由の1つとして、先生はスピリチュアリティは物理的なものではないかが、特に日本では、生活や習慣と結びついている為と仰っていました。つまり、日本では生活そのものがスピリチュアルという側面があるということです。例として、挙げておられました。暮らしの中で仏様に手を合わせる行為はアメリカ人からする

と、「スピリチュアルな行為」と見なされるわけですが、日本人としては「習慣」であつて別にスピリチュアルとは思っていないというのです。

日本人は「スピリチュアル」と言えば「何か宇宙とのつながりを感じる」といった風なものでしょ」というようなアメリカ人とは異なる概念を想起するのだそうです。このことからアメリカと日本でスピリチュアリティを同じ言葉で表現するのは難しいという面があるといえるでしょう。最終的に定義の方向性として何を指すかという、①日本とアメリカの一致性を目指すのか、②日本とアメリカの個別性を目指すのか、に分かれるでしょう。しかし、いずれにせよ、「スピリチュアリティ」の定義は重要であり、是非やらなくてはならないと述べておられました。

総じて、先生のお人柄があらわれたユニークなコメントスタイルでした。しかし、一般の方を対象としたシンポジウムを開催する時は時にこのような「親しみやすさ」も考慮せねばならないのではないかと勉強させていただきました。

### 2-2. 菅原 研州先生(曹洞宗総合研究センター)のコメント

次に曹洞宗総合研究センターの菅原研州先生が登場されました。先生は曹洞宗の現役の僧侶でいらっしゃると同時に、曹洞宗の教学のご研究もされています。お若いという印象でしたが、仏教者特有の「和顔愛語(わけんあいご)」を湛えたご様子は、仏道修行の賜物ではないかと思われました。

先生は仏教者の目から「スピリチュアリティ」とはどのように映るのかという点について「正直よくわからない」と述べておられました。しかし、この用語はメディアによる多用を通して、仏教者の周りにも浸透しようとしているそうです。その事実を示すエピソードとして、先生ご自身も檀家さんから「おっさん(僧侶を指す通称)はオーラや霊がみえますか？」と尋ねられることが増えたそうですが、「そういうものは私には見えません」とお答えになると質問された方はがっかりした表情をされるそうです。この点について先生はユーモアたっぷりに「オーラはオーラが見えねえだ」と仰っておら

れました。

このたびのご発表では、「スピリチュアリティ」について、現在の日本仏教(曹洞宗)の若手僧侶がどのように理解しているかを見ることで、「スピリチュアリティ」と宗教との関わり的一端を探ってみたいとされていました。

### ①「スピリチュアリティ」という言葉に対する僧侶を対象としたアンケート調査

今年の5月19日に曹洞宗の若手の僧侶の方を対象として「スピリチュアリティ」という言葉に対するアンケート調査が実施されたそうです。その際、された設問は3つ、以下の通りです。

1「スピリチュアリティ」の意味をどのように理解していますか。

2「スピリチュアリティ」から連想される語句を次の選択肢から選んで下さい(複数回答可)。

・心霊現象・守護霊・靈感商法・霊能者・予言者・パワースポット・占い・霊性  
 ・鈴木大拙・キリスト教・仏教・神道・宗教性・超能力・その他(\_\_\_\_\_)

3「スピリチュアリティ」が流行した時、仏教の側でどのような影響があると思いますか。

参加者数は、ほぼ100名であり、その全員にアンケートを配付。有効回答数は27でした。回答した者は全員、曹洞宗の僧侶(男性)であり、年齢は20～40代でありました。在住都道府県は、北海道から大分県までと分散していました。アンケートの結果、以下のような傾向が確認されたそうです。

設問1について、主にイメージされているのは「霊」に因んだ語句であり、それに次いで「精神」に因んだ語句でした。それがイメージとして表現されれば、「目に見えない世界」、あるいは「超自然現象」などとなるのでしょうか。物理や科学といった概念とは対極の意味です。また、曖昧で意味が確定できないことを指摘した者もいました。

そして、これらのイメージから更に踏み込んだ社会現象、あるいは機能・効能にまで言及した回答も見られたそうです。それは、スピリチュアリティについて、癒し効果、ヒーリングなどとして理解

していることが挙げられます。また、特にマスメディアの影響を指摘する者がいたことも踏まえ、一部の「霊能力者」が中心となったテレビ番組の構成から、この語のイメージを取り出している可能性も指摘できるでしょう。

設問2について、「霊性」のイメージが強いことが浮かび上がりました。回答者における同語への理解ですが、「霊性」の回答者の内、6名が「霊能者」をともに選び、「宗教性」をともに選んだ者が3名に留まることからすると、「霊性」は「宗教性」の意ではなく、「霊」のことでしょう。「霊能者」が13名で、「守護霊」も11名とそれぞれ多かった。この理由を、「その他」の回答も踏まえて推測すると、特に「江原啓之」をイメージしている可能性があります。これは、マスメディアの影響が強いといえるでしょう。

また、「パワースポット」を連想する者も多いのですが、最近のメディアの取り上げが影響しているのでしょうか。寺院は、「パワースポット」に選ばれることで観光客の増加が期待できますが、それが高い関心に繋がったものかもしれません。一方で、「神道」「キリスト教」「仏教」といった特定の宗教・宗派のイメージは少ないようでした。よって、現行の宗教とは一線を画して理解しているといえるでしょう。

最後に設問3についてですが、10名が、スピリチュアリティの悪影響を指摘していました。内容は主に、「スピリチュアリティ＝宗教と誤解される」ことで仏教教理への誤解が進み、霊能力者への依存により「僧侶の立場がなくなる」ことへの危惧として現れていました。しかし、一方でこの10名の内、5名はスピリチュアリティの流行によって、「仏教に興味を持つきっかけにもなり得る」とも期待しているとの回答もあったそうです。具体的には、「本来的な仏教の区別が発信できる」機会を得たり、霊・靈魂への関心によって、「先祖供養が見直される」ことなどです。3名が、好影響を指摘していました。具体的には、自分の内面への関心が増加することにより、「坐禅がもっと一般的に」なり、坐禅会への参加者数増加、パワースポットに対する観光客の増加による好影響です。2名が、影響があるとしつつも、好悪の判断は書

いていませんでした。ただし、内 1 名は、檀家制度から開放された寺院運営への移行を指摘していたそうです。6 名が、積極的に影響無しと答えていました。特に、スピリチュアリティを「一過性のブームで終わる」と見て、それに左右されない「仏道の実践」を強調する回答がありました(2 名)。

6 名が、白紙回答でした。設問は、影響があることを前提に聞いたものであるから、白紙は、影響の無さを指摘する可能性、あるいは、ただわけの分からないものとイメージした可能性があります。ここでの判断は避けたいとされました。

## ②鈴木正三が見た世俗の流行と仏教への影響について

次に先生は、江戸時代の仏教者 鈴木正三(1579 ~ 1655)の視点になぞらえて、現代の仏教者の視点との比較をされました。鈴木正三について簡単にご説明をします。江戸時代初期、禪門や浄土門での修行を経て独自の「仁王禪」を拳唱した鈴木正三は元々三河(現在の愛知県東部)出身の武士で、後には徳川家の旗本になった人物です。ところが、本人は幼少の頃より仏教に親しみ、特に 17 歳の時に読んだ仏典の影響で、遁世の思いを強くしたといわれています。立場上、関ヶ原の合戦や大坂の陣にも参陣したのですが、その中でも修行を欠かすことはなかったといわれています。

1620 年に家督を弟に譲り、遁世すると、後は 1 人の仏教者として、三河や江戸で後進を指導し 1655 年に亡くなりました。正三は、出家した可能性を、多くの伝記では指摘されているそうですが、本人は謙遜して僧服を着なかったと伝える文献もあります。また、天草に開いた寺院では、正三を「開山(僧侶)」ではなく「開基(在家)」とし、「鈴木正三庵主」と、位牌を俗名で書く場合が多いとのこと。

正三はまた、世俗民衆の教化に並々ならぬ力を尽くした人であったという一面があったそうで、それは正三が独自に、世間の流行や動向を分析していたといえるでしょう。菅原先生は、正三がしたための手紙(送った相手の名前や年月は具体的に記されていないものの、文面からは年齢に

いたって書かれたものだと推定できる)に注目され、紹介されました。手紙には正三が「仏法が興隆するのではないかと思わせる瑞相」を7つの要点を挙げていました。ここでは先のアンケート調査と関連すると思われる4と6の要点と最後に書かれた正三の感想を掲載します。

4、跡形も無いような古いお堂なのに、様々な靈験があるとして、多くの人が集まっている場所が方々にあるようです。

6、伊勢神宮に対し、諸国から若者が夥しく抜け参り(=親の許可なく参詣すること)しているようです。これは、天地に勝れた雰囲気が出て、皆正直なる心になったためと思われる。

### \* 正三の感想

これらの姿をもって占ってみますと、近い内に、必ずや仏法が興隆する時節が来るものと思えます。しかし、我々は老い先短いので、次に生まれ変わったときに、仏法に逢うこととしましょう。以上。

「4」に注目しますと、これは現在でいうところの、パワースポットだと考えられ、当時にも、そのような民衆の欲求が確認されていたと判断できます。また、「6」には伊勢神宮の参詣の様子を伝え聞き、民衆の心根(宗教心)を推定しようとする正三の態度が見えます。

そして、手紙から推察されますのが、民衆レベルにおける諸事の流行を受けて、正三が「仏法の興隆」を確信していることです。

①でのアンケートでは、スピリチュアリティの流行によって、仏教への関心が高まることを期待する僧侶の意見が一定量ありましたが、そこに、正三と同じ意図が見えるのではないのでしょうか。この展開が果たして、正三の望む「仏法の興隆」といえるかは分からないし、現状もまた、同じ状況であるかもしれないことは、仏教者は知っておいて良いように思うと結んでおられました。

報告者は、個人的に「鈴木正三」という人物がいかなる人生を歩み、求道の生活と娑婆での生活(武士としての生活)との狭間でどのように苦悩し、そして、どのような心境に至ったのかに興

味を持ちました。そして、正三の目線から、スピリチュアリティを眺めた時、それは同時に今後の仏教者の持つスピリチュアリティのイメージを垣間見ることになるのかもしれませんが。

### 2-3. 中尾 将大(大阪大谷大学)のコメント

最後に報告者が登壇しました。私も既述のとおり、スピリチュアリティについては全くの素人です。専門的な研究をしたこともなければ、知識も持ち合わせておりません。ですから、素人の視点・立場から色々とお話をさせていただきました。以下、要点ごとにご報告したいと思います。

#### ①「スピリチュアリティ」の元来の意味から連想すること

私がお講演の中で最初に注目したのが、「Spiritus」という言葉でした。Spiritusには「息」、「魂」という意味があるそうですが、特に「息」という言葉に注目しました。上座部仏教では「呼吸による気づきの瞑想」というものがあります。すなわち、呼吸を整えることで集中力を高め、自らの精神を整える瞑想です。また、一方で「眼にはみえないはたらき」と呼吸を合わせていくことなのかなとも思いました。仏典などを紐解きますと、この世界には眼には見えない仏智のはたらき(大乘経典:無量寿経)あるいは聖霊のはたらき(新約聖書:使徒行伝第二章)が存在するとされています。そして、それは私の思量(思議)を超えたはたらき(不可思議)とされます。そのはたらきを感得し、共鳴・共振し(そのはたらきにアクセスする)、一体となることが悟りであるとの説もあります(大乘起信論)。そのような体験をされた人もおります。例えば宇宙飛行士のエド・ミッチェルは宇宙体験を通じて自身の思量を超えた存在を感じ取ったと語っております。

そのような体験をした結果、物質的な価値観を超え、人生における迷いや苦悩から解放され、仏智の導きのままに生きることができようになるとされます。その他の具体例としては浄土真宗における篤信の在家信者である「妙好人(みょうこうにん)」と呼ばれる人々やキリスト教における聖人(ペルナデッタ、カタリナなど)などがあげられるでしょう。そのためにはそのはたらきが絶え

ず我々に働きかけ、呼びかけているということを疑いなく受け入れ、信じることでであるとされています(浄土真宗では「行者のはからいを離れる」と言われる)。

また、イエス・キリストは弟子達に「神の国に入るには幼子のようにならねばならない」と述べたとされており、イエスご自身も「父なる神」と親しみを込めて呼びかけられたと言われます。さらに、江戸時代の妙好人のひとり、讃岐の庄松(さぬきのしょうま)は仏壇の前で阿弥陀如来像に向かってまるで赤子のように「バァー」と言って甘えたと伝えられております(庄松ありのまま記)。心理学者W・ジェームズは信仰心という心的活動についてあたかも母親の胎内に戻り、母子の一体感と似たものであるとし、信仰者は言いようのない安心感を得ているのではないかという意味の指摘をしております。ジェームズの指摘はイエスの述べたことや庄松の行動を上手く説明するものではないでしょうか(後の調べで、心理学者のエリクソンも同様の指摘をしていました)。以上から「眼にはみえないはたらき」を感得するためにはその働きに対して「幼子のような純真さ」、および「素直に母親に甘えるような態度」も必要と言えるでしょう。そしてそれが「信仰心」と言えるものかもしれません。

#### ②「眼にはみえないはたらき」を感得するための方法

さらに「眼にはみえないはたらき」を感得するための方法としては、念仏、瞑想、写経、祈り、讃美歌などがあげられると思われ、それらに加えて各宗教の教義に基づく生活実践も含まれるでしょう。例えば、仏教の開祖 釈尊は修行者としての生活規範として八つの正しい道(四諦八正道)を実践するように指導されております。そのような信仰生活を送るうちに、いつの日か、眼にはみえないはたらきと出会うものと考えられます。その過程においては近代科学に基づく知性・理性のみでは、その働きを捉えることはできないのではないのでしょうか。すなわち、眼にはみえないはたらきは頭脳で考えて捉えることはできないのだと思います。そのはたらきをとらえるためには直感による「感性」の働きも重要であるのではな

いでしょうか。さらに前段階として自身の限界や至らなさ、欠点を知る必要があるでしょう(愚に気づく、悔い改める)。すなわち己の至らなさがわかるからこそ、私の思量を超えたはたらきを受け入れることができるのではないのでしょうか。

### ③コメンテーターの考える「信仰心」および「スピリチュアリティ」

私にとりまして、信仰とは「己の中に愚かさ・至らなさを見出し、その事実を受け止めて反省し(悔い改め)、勇気を持って修正する努力を行い、私の思量を超えた眼にはみえないはたらき(仏智のはたらき)が存在することを疑いなく受け入れ、既述の方法を用いてそのはたらきと共通していくこと」と捉えております。そして、スピリチュアリティとは、「信仰の過程で感得されるすべてのこと・もの」であり、それはつまるところ、言葉では表現できないのかもしれませんが。あえてそれを捉えようとするならば、信仰生活の実践によって「眼にはみえないはたらき」との出会いを果たされた方の「表情」、「立ち居振る舞い」、「雰囲気」に、にじみ出てくるものなのではないかと思われまふ。したがって私はスピリチュアリティと宗教(信仰)は不可分ではないかと考えております。

### ④「スピリチュアルな人」と「スピリチュアルでない人」について

ご講演の中で示された「スピリチュアルな人」と「そうでない人」のお写真を拝見して私なりに両者の違いを考えてみました。まず、「スピリチュアルでない人」ですが、まず彼らは「眼に見えるもの」しか信じていないのではないかと思います。すなわち、近代科学の合理主義・効率主義に基づき、物質的要因を操作することで自己と自己を取り巻く環境を変容させていき、「物質的豊かさ」が「人生のおける幸福・成功」と考え、自己中心的な欲望追求型の生き方をされている人達なのではないかと思われまふ。中には「宗教家」として自他共に認めている人物も含まれておりますが、基本的にはその方も上記のような価値観でいらっしやると考えまふ。そのような方々を通じてもう1点、考えられることは「眼にはみえないはたらき」とつながるツールの用い方を誤るとよくないのではないかということです。具体的には、「信仰」や

「神」の名の元に人々をして破壊活動などの行為に走らせてしまうことなどが1例として挙げられます。このことは言わば、目には見えない仏智のはたらきとつながらない(間違い電話)あるいはそれとは別のはたらきとつながっているのではないかと考えることができるでしょう。仏智のはたらきとの出会いを果たし、そのはたらきとつながっている人かどうかをきちんと見極める必要があるのではないのでしょうか。その判断材料としては色々あるかとは思いますが、私の考える点は以下の3点です。①その方の言動と行為が一致しているか、②生活習慣が乱れていないか、③周囲人たちを大切にしているのか、これらの判断基準はご発表の中で「スピリチュアルな人」と分類されていた方々に共通している点ではないかと考えまふ。

一方、「スピリチュアルな人」ですが、彼らの特徴として「私心がない」と言うことだと思われまふ。すなわち、自己中心的な欲望追求型の生き方ではなく、周囲の幸せの実現とそれへの奉仕に生きた方々ではないかと思われまふ。私心がありませんから、仏智のはたらきのままに生きられた方々と言えるのではないのでしょうか。彼らにとっては他者の幸せがそのまま自身の幸せになっていたのだと思われまふ。まさに仏智のはたらきと一体となった境地に至っているのだと思われまふ(大乘仏教一即多・多即一：一心源に帰する)。これは私の想像ですが、彼らの考えや行動はもはや彼ら個人の「頭で考えた」ことではなく、神仏の導きのままに「感得した」結果、表されたものではないかと思うのです。スピリチュアルなものとの分類が可能となれば、スピリチュアリティとは異なる事象への接近の危険性は回避できるようになるかもしれません。

### ⑤まとめ

それでは、我々が「スピリチュアルな人たち」同様、眼にはみえないはたらき(仏智)との出会いを果たし、その導きのままに生きるにはどのようにすればいいのでしょうか。私は次のように考えまふ。まずは先ほどの判断基準を踏まえて、指導者の見極めをきちんとした上で、仏典や聖書に書かれてあるツール(行)を用いるのが良いのではないかと思います。具体的には先ほど述べたよう



な念仏、瞑想、写経、祈り、讃美歌などに加えて各宗教の教義に基づく生活実践も含まれることでしょう。

その理由としては①長い歴史の中で培われてきた、②世界中に伝播し、共感と支持を得ている、③仏教、キリスト教などでは創始者の死後も教えが様々な形で継承され、実践されており、多くの覚者や聖人を輩出しているという事実が挙げられます。

そして、仏教で説かれていることですが、「自ら行ずることによって慧と出会う」ということだと思います。すなわち、自ら「体験すること」がスピリチュアリティを理解するうえで大切ではないかと考えます。「みな、怠ることなく精進せよ、さすればいつの日かきっとニルヴァーナ(涅槃)の境地に到達するであろう。」これは釈尊の遺教であります。

### ⑥今後の展望

ところで、日本は「世俗化が進んだ無宗教社会である」と指摘する学識者もおられます。このたびの震災の一連の事象をかんがみても、科学だけではすべてを説明できない・幸福になることはできないと言えるのではないのでしょうか。例えば、過日の福島における原発事故は科学を駆使してきた現代人が飼い犬に手をかまれたようなものではないかと思いました。もちろん、自然災害ということも背景にあります。私はこの事故は現代人の「慢心」から生じた事故という側面も含まれると思います。自然の力を前にして、人間とはなんと無力なものかと思知らされました。現代人は今一度、近代科学に基づいた合理主義・効率主義に偏った考え方・行為を反省し、私の思量を超えた存在を感じ、自らの愚かさ、至らなさ、小ささを自覚することで「謙虚」になれるのではないかと思います。そして、人は謙虚になることで事象をありのままに観察し、自己にとって都合のいい身びいきな考えや行動を慎むことができるのではないかと考えます。

以上、ご講演における全ての話題について触れることはできませんでしたが、今後、現代人の心の空洞化を埋めていくことができるのではないかという観点から、スピリチュアリティ研究の重要

性は増していくことでしょう。そして、研究を通じてスピリチュアリティに関わる色々な立場の人々が自らの番地を精緻化し、スピリチュアルなもの・人とそうでないもの・人との区別が明らかになっていくことが期待されると思われます。

### 3. 質疑応答

最後にフロアとの質疑応答が行われた。その全てを詳細にご報告するには紙面も足りず、内容も高度で本当に「知恵熱」を発症しかねないと思います。もちろん、報告者の力量の無さもあるのですが……。しかし、印象としましては、多くの人が「スピリチュアリティ」に関心を持ち、あらゆる立場からの定義を試みておられました。また、スピリチュアリティは社会に対して何が出来るのか、教育、医療、社会的活動等々、そして、スピリチュアリティと宗教の関連性の有無などの議論が行われ、報告者もフロアからの意見を前にして、驚きと気後れを覚えたほどでした。本当に色々な意見が出たのですが、最後に東洋大学名誉教授の恩田 彰先生がされたご発言が包括的なご意見ではなかったかと思われましたので、要点をご紹介します。また、先生のご指摘は今後のスピリチュアリティ研究を進める上で、非常に示唆に富んだものではないかと思いました。

「スピリチュアリティの定義はしなければなりません。スピリチュアリティの定義としては「普遍的または究極的な宗教意識」、「宗教性の本質」というものもあります。一方で、禅などの実践に眼を向けますと、自らの智慧に気づき、安心(あんじん)を得ているということがあります。そうしますと、スピリチュアリティは智慧、ウィズダム(叡智)と捉えることもできます。スピリチュアリティは主観と客観を含んだものと捉えることができ、客観があるということであれば、これは科学の対象に成り得ます。一方で、スピリチュアリティを科学で捉えることができない宗教の側面であるとの見方もあります。

しかし、スピリチュアリティを智慧と捉えるならば、それによって安心が得られるといえるでしょう。安心を得るということは幸福感、ハピネスも得

られる。また、ウェルビーイング(良好な人間存在)も得られるということになり、これは臨床とのつながりも見えてくるものではないでしょうか。智慧とは真実であり、「真の事実」であります。これは主客一如的なものです。そして、真実と出会うということは真の自己への気づきと安心を得ることであります。以上からスピリチュアリティの概念を知性的なものと感性的なもの(幸せなど)があるとして見直してみるのも面白いのではないかと思います。

私は、スピリチュアリティとは「智慧」だと思っています。それは単なるウイズダムとは異なり、仏教の悟りの対象ではないでしょうか。人間は本当に安心を得れば、天地がひっくり返るわけですから、躍り上がって世界中を走り回りたくなる思いになるでしょう。よってスピリチュアリティは知性的に捉えるだけでは十分ではなく、感性において

自ら納得するものです。だからこそ信仰の対象になるのです。また、仏教には「信」というものがありますが、これは真実をはっきりと掴むことなのです。智慧が生まれると同時に信が得られるので、私はこの両者が結びついていないと本物ではないと思います。」

読者の皆様は先生のご意見をどのように受け止められたでしょうか。「スピリチュアリティ」に関する議論はこれから、もっともとなされていくべきではないかと思っています。このたびのシンポジウムはその一歩と言えるのではないのでしょうか。宗教心理学研究会でも今後、このような企画や試みが継続して行われ、この分野が益々発展していくことを願いつつ、筆を置きたいと思いません。

## 宗教心理学研究会のフコロ具合

Masami Takahashi(Northeastern Illinois University)

今回のシンポジウムは、果たしてスピリチュアリティという概念を科学(厳密に言うと心理学)という土俵に乗せて論ずることが正しいか否かが根本にあったように思う。似たような議論は極端な行動主義が幅を利かせていた20世紀中盤に「認知」という概念についてもおこなわれ、また最近では発達心理学で「叡智」についての議論とも通じるものがある。いずれの場合も心理学の「懐」に深みがついた時期と合致し、その後それぞれの分野の発展につながったわけである。しかし、その一方で超心理学の分野のように一時期(1930-1960年代)ブームになりながらも、その後、心理学の一線から消えてしまった例もある。これらの例にはどのような違いがあるのだろうか？

そこには様々な理由が挙げられるが、一つの大きな要因は、認知や叡智の分野と比べて超心理学は当時、ポップカルチャーの中で一般大衆を巻き込んで、現象そのものに焦点をあてすぎ、

「科学」としての基準である現象の明確な定義や、それに応ずる実証的な手法の研究が後手に回ってしまったことが考えられる。そして同じようなことが現在の日本のスピリチュアリティの分野に言えるのではないかと危惧する。それは研究者がスピリチュアリティという概念定義や科学的手法の発展に努力を注ぐよりも早く、ポップカルチャーの大きな波が非科学的なスピリチュアリティという概念をすでに作りあげてしまったことである。この事実は巷でスピリチュアルという名のつくもの(本や雑誌、街角の看板)を見ても一目瞭然である。また最近の我々の実証研究を見ても、スピリチュアリティというカタカナの言葉がこのような影響を受け、一般大衆の中では「オーラ」や「心霊」というニュアンスを強く含んでいることから明らかである。

シンポジウムでも荒川先生が言及したように、スピリチュアリティが心霊現象などの関連概念と理解されることは、大衆文化という土俵の上では

あまり問題はないであろう。しかし、この概念と研究や檀家の方々と現場で直面しなければならない中尾先生や菅原和尚にとっては大問題である。さらに比較文化的な研究を行う我々にとっては、例えば英語とカタカナのスピリチュアリティがほとんど異質なものと理解されると、研究そのものが困難なものになってしまう。さらにこの次元での議論を強いられるがために、より突っ込んだ概念定義の議論に行きつかないのが現状である。例えば、スピリチュアリティとオーラの色との関係以前にスピリチュアリティの構成概念の妥当性を得るために宗教観や生きる意味合いとの関係の議論が優先されるべきではなからうか。

以前にもこの場を借りて述べたが、当研究会(宗教心理学研究会)が日本におけるスピリチュアリティという概念の今後の方向性を指し示すべ

きではないかと思う。その際にこの研究会のフトコロの深さが見て取れるのではないかと思えるのである。例えば、スピリチュアリティという概念が淘汰されるのを何もせず見守るだけなのか、それとも日本以外の団体やいくつかの雑誌がそうしてきたように(例:アメリカ心理学会 Division36 刊行の雑誌: Psychology of Religion and Spirituality), 我々の団体名称の一部に取り入れる、活動目的の重要な要因として明示する、などとして積極的に科学の土俵に引っ張ってくるのかということである。もし、今の大事な時期に浅いフトコロで手をこまねいていると、今後の日本における宗教心理学会は、その大きな位置を占めるスピリチュアリティという概念が抜け落ちた、間の抜けた学会となっていく可能性もあるように思われるのである。

## 何をスピリチュアリティと呼ぶべきかという問いはどのような場面で成り立つか?—公開シンポジウムの感想

荒川 歩(武蔵野美術大学)

公開シンポジウムの議論は、現在の日本の「市井」で流通している「スピリチュアリティ」という言葉は、欧米の(?)心理学者が考える「スピリチュアリティ」とは少しずれているようだという現状認識に基づいて、①「スピリチュアリティ」研究者が「市井」の人に誤解される可能性、②「市井」の「スピリチュアリティ」を日本のスピリチュアリティ概念として扱った場合の欧米の研究と断絶が起る可能性が問題として提起された。これらが問題として提起された背景には、「市井」に流通する「スピリチュアリティ」は、本来の意味からみれば誤用であり、弊害をもたらす可能性があるという認識があり、また、スピリチュアリティの定義が不十分であるという認識があったと思われる。

これらの議論は、2つの文脈において論ずることが可能であろう。第1は、科学技術社会論、科学社会学における専門家-非専門家コミュニケーションの文脈の問題として扱う場合である。その場

合、シンポジウム時にも議論したように、「市井」で流通している「スピリチュアリティ」を批判するには、正当性ではなく、それら「スピリチュアリティ」と「スピリチュアリティ」が流通することのリスクとベネフィットを整理することによって影響力のある議論がなされるであろう。「科学的に正しい」(と『科学者』が考える)概念と、人々に流通することで有益な概念は異なることがあるからである(たとえばせつかくまく回っているものを「それは偽薬効果ですよ」とデブリーフィングしまくる正義って誰のための正義だろうか?もちろん短期的にみてもの効用だけではなく、長期的にみても「騙された」ということで失うもののリスクも考慮すべきであるが)。

ただ、他方で、このような齟齬は、心理学研究の文脈からみても、スピリチュアリティという現象を捉える上で興味深い現象であるといえる。心理学が研究対象とするスピリチュアリティは、まず

はどこにあると考えればいだろうか？人々がスピリチュアリティだと思っているナニモノかがスピリチュアリティなのか、それとも、行動や現象など人々の意識しないところにもスピリチュアリティがあると考えるのか。

前者であるならば、日本のスピリチュアリティは、まさに「スピリチュアリティ」なのであろう。他方、後者であるならば、どちらにせよ、概念の二重化は避けられない。「市井」の人々(および研究者も大なり小なり)は、「スピリチュアル諸現象」のうちで、それぞれの歴史的経緯や、需要に適合した一部のものを「スピリチュアリティ」として扱っているにすぎないだろう。

後者の場合、スピリチュアルな諸現象をどの視点によって線引きするかは、大きな問題となる。スピリチュアリティは、単一のナニモノかではなく、物理的、心理的概念で説明されるものの残余

であり、複数の異なるレベルの現象を指している可能性がある。それが、コアを持たない残余であるなら、外延を列記することで理解を深めるのは一つの手である。他方で、どのような線引き/定義で内包的説明をしたところで正当で唯一のものを形成するのは難しいだろう。どのような目的のために定義するかを明らかにすることが求められるだろう。

今回のシンポジウムで菅原研州先生が指摘しておられたように、宗教に(意識されるものとしての)「スピリチュアリティ」は必要ではないだろう。宗教行動を見た場合、宗教心も必要ではないだろう。ある生き方を規定するシステムとしての宗教に潜むものをどのように捉えるか、スピリチュアリティ問題は、宗教心理学を考える上での試金石になるかもしれない。

## スピリチュアリティと仏教者について

菅原研州(曹洞宗総合研究センター:非会員)

まずは、発表の機会を下さった、Masami Takahashi 先生と松島公望先生に御礼を申し上げます。ふとしたことから知り合い、文字通りその「ご縁」で今回のシンポジウムへの出席となった。

当ニューズレターには、当日の感想を、というご依頼ではあったのだが、小生の研究分野は、所属する曹洞宗の「宗学」という、伝統的ではあるが、極めて狭い範囲を扱うものであり、とてもではないが、シンポジウム全体に対する感想、他の発表者の皆さまについての感想など論じる力量はない。

なお、当日、レジュメ等の無配付を遺憾とされた意見があったとお聞きしたので、本論は発表要旨を示すことで感想に代えたい。

小生は、曹洞宗の若手僧侶が感じている「スピリチュアリティ」に関するアンケート調査の結果を発表させて戴いた。5月19日、曹洞宗宗務庁の外郭団体である全国曹洞宗青年会の総会が行

われた(会場:東京都港区・曹洞宗檀信徒会館)のだが、全国からの参加者が期待できるため、総会中にアンケート調査を行った。

設問は3つ、以下の通りである。

- 1:「スピリチュアリティ」の意味をどのように理解していますか。
- 2:「スピリチュアリティ」から連想される語句を次の選択肢から選んで下さい(複数回答可)。
  - ・心霊現象・守護霊・靈感商法・霊能者・予言者・パワースポット・占い・霊性
  - ・鈴木大拙・キリスト教・仏教・神道・宗教性・超能力・その他(\_\_\_\_\_)
- 3:「スピリチュアリティ」が流行した時、仏教の側でどのような影響があると思いますか。

参加者数の正確な把握は出来なかったが、ほぼ100名であり(同会事務局に確認)、その全員にアンケートを配付した。有効回答数は27であ

った。回答した者は全て曹洞宗の僧侶(男性)であり、年齢は20～40代である。在住都道府県は、北海道から大分県までと分散しているが、静岡県(9名)が多く、次いで長野県・愛媛県(それぞれ3名)であった。

**設問1:(有効回答数27人中、26人が回答)**

まず、言葉そのものの意味について挙げられた回答を分類したが、主にイメージされているのは「霊」に因んだ語句であり、それに次いで「精神」に因んだ語句であった。それがイメージとして表現されれば、「目に見えない世界」、あるいは「超自然現象」などともなるのであろう。物理や科学といった概念とは対極の意味で理解されている。

**設問2:(有効回答数27人中、26人が回答)**

この設問では、「霊性」と答えた者が15名と多く、そのイメージが強い。回答者の同語への理解は、「霊性」の回答者の内、6名が「霊能者」をともに選び、「宗教性」をともに選んだ者が3名に留まることからすれば、「霊性」は「宗教性」の意味ではなく、「霊」のことであろう。

「霊能者」が13名で、「守護霊」も11名とそれぞれ多い。一方で、「神道」「キリスト教」「仏教」といった特定の宗教・宗派のイメージは少ない。現行の宗教とは一線を画して理解していることが分かる。

**設問3:(有効回答数27人中、20人が回答)**

「スピリチュアリティ」が流行した時、仏教の側でどのような影響があるかを問うたが、10名が悪影響を指摘している。内容は概ね、「スピリチュアリティ＝宗教と誤解される」ことで仏教教理への誤解が進み、霊能力者への依存により「僧侶

の立場がなくなる」ことへの危惧として現れている。

しかし、一方でこの10名の内5名は、流行によって、「仏教に興味を持つきっかけにもなり得る」とも期待している。具体的には、混同を逆手にとって、「本来的な仏教の区別が発信できる」機会を得たり、霊・靈魂への関心によって、「先祖供養が見直される」ことなどである。

3名が、好影響を指摘している。具体的には、自分の内面への関心が増加することにより、「坐禅がもっと一般的に」なり、坐禅会への参加者数増加、パワースポットに対する観光客の増加による好影響である。

**結論に代えて**

紙幅の都合上、各々の調査結果の内、重要と思われる点のみを抽出して記事とした。

現場の僧侶でも、宗教学などの研究や、終末期医療などに従事するでもない限り、メディアから入る影響をただ受けるのみであるといえる。我々禅宗の僧侶は、坐禅を通して、「本来の自己」を問うが、実践的には、存在の根源や、生きる意味の「真のあり方」を明らかにする。その一方で、檀信徒の先祖(霊)を供養する。

つまり、禅僧とスピリチュアリティは近親的であるかもしれない。それが、我々にとって、スピリチュアリティへの何とも微妙な距離感、つまり混同への恐れと、その流行の享受への期待になるのだと思われる。

この発表後、スピリチュアリティ研究に目を通すことがあったが、過度に宗教と分けようとする余り、宗教の側の多様性を見落としているかの様な見解も見えた。この辺については、別の機会に提言させていただきたいと思う。

## 公開シンポジウムの感想から「スピリチュアリティ」の定義について

小林正樹(中央学術研究所)

Takahashi 先生は、アメリカで使われているスピリチュアリティという言葉の意味と、日本で使われているスピリチュアリティという言葉の意味は、相当異なっているということ、「寿司」に対する日米両国民のイメージの違いをアナロジーとして説明してくださった。このアナロジーはとてもわかりやすく、大変興味を持ったので、Takahashi 先生に対し、アメリカで使われているスピリチュアリティが意味するものについて、もう少し具体的に説明してほしいという質問をさせていただいた。

私にとっては、日本で使われているスピリチュアリティのイメージはなんとなくつかめるものの、アメリカで使われているスピリチュアリティについては全くわからない。そのため、両者のどこが違っているのかを理解するためには、まず、アメリカで使われているスピリチュアリティの意味について、もっと詳しく知る必要があったからである。しかし、残念ながら、当日の Takahashi 先生の説明だけでは、両者の違いについて、寿司のアナロジーほどには明確な違いとしてイメージすることはできなかった。できれば、もう少し詳細かつ具体的に、アメリカで使われているスピリチュアリティについて説明してほしいと感じた。(この点については、後日、『宗教心理学概論』の第3章「宗教とスピリチュアリティ」(Takahashi 先生が分担執筆)を読むことによって解決された。)

なお、Takahashi 先生は、スピーチの中で、日本で使われているスピリチュアリティという言葉「カタカナのスピリチュアリティ」と表現し、アメリカで使われているスピリチュアリティと区別されていたので、本感想でも、以後、アメリカで使われるスピリチュアリティを「spirituality」と表記し、日本で使われるスピリチュアリティを「スピリチュアリティ」と表記し、両者を含む一般的な概念をカギ括弧無し「スピリチュアリティ」と表記して区別してみたいと思う。

当日、「spirituality」や「スピリチュアリティ」の定義の問題について意見が交わされたが、少

なくとも「スピリチュアリティ」という言葉が問題となるためには、この言葉の必要性が前提になるのではないかと思った。この言葉は、我々にとって必要なのだろうかということを再吟味する必要があるのではないか。必要性というのは、「スピリチュアリティ」という言葉でしか表現しえないものが存在し、他の言葉では代替不可能な意味が存在するののかということと関係するように思う。単なる transliteration (音訳)を超え、従来の日本語では代替不可能な表現として、日本において、「スピリチュアリティ」という言葉を使わなければならない必要性があるのかどうか。この点において、私個人の感覚では、「今のところ」、「スピリチュアリティ」というカタカナ言葉を、「あえて」使う必要性はなく、日本語としての「精神性」や「霊性」という言葉を使えばいいのではないかと感じている。しかしながら、周囲の多くの人々が使うようになると、「意思疎通という点での必要性」が生じることになるので、やはり、使わざるを得ないことになりそうなのだが...。(この点について、早くも現実のものとなりつつある。例えば、現在申請中の科研プロジェクトのタイトルにも「スピリチュアリティ」という言葉が含まれており、少なくとも、意思疎通における必要性は生じている。)

ところで、最近、『スピリチュアリティは健康をもたらすか』という本を読む機会があり、この中で、筆者である H. Koenig がスピリチュアリティの定義について述べている部分があったので(\*), それを簡単に紹介しつつ、これらに基づいた私の考えも述べてみたい。

H. Koenig は、K. Pargament や D. Hufford の定義を紹介しつつ、彼独自の見解を述べている。これらの議論は、もちろん、キリスト教世界における「spirituality」の定義に関する議論であると思うが、H. Koenig によれば、「spirituality」の定義は、研究用である狭義の定義と、臨床用である広義の定義の二つを使い分ける方が良く主張している。狭義の定義とし

ては、「超越に対する個人的な関係」という D. Hufford の定義を紹介し、H. Koenig の定義はこの定義に最も近いとしつつ、「spirituality」は宗教と何らかのかかわりがなければならぬと主張する。一方、広義の定義としては、厳密に定義する必要はないとし、できるだけ幅広く定義することがより実用的であるとしている。シンポジウムでも、同様の発言があったように思う。研究用の狭義の定義に重点を置いて話されたのが Takahashi 先生で、実用性に重点を置いて話されたのが荒川先生だったのではないかという印象を持った。

私も、一つの定義に統一するのは無理があるように思えるので、基本的には H. Koenig の主張のように、「spirituality」の定義は、広義と狭義に分けて区別した方が良く思う。しかし、狭義の定義をさらに二つに分け、三種類の定義とした方がもっと良いのではないかと思う。二つに分ける狭義の定義は、上記の定義をベースとして表現するならば、例えば、「超越に対する個人的な関係であって、宗教的なもの」(上記の H.

Koenig の定義に相当)と「超越に対する個人的な関係であるが、宗教的ではないもの」の二通りである。先にも指摘したように、H. Koenig は、狭義の「spirituality」は宗教的でなければならぬと主張しているが、キリスト教文化圏の人々であっても、「超越に対する個人的な関係であるが、宗教的ではないもの」(スピリチュアルだが宗教的ではない)の存在を認める傾向が存在するからである。

「spirituality」の定義に関する H. Koenig 等の議論が、そのまま「スピリチュアリティ」の議論に当てはまるものかどうかはわからないが、スピリチュアリティについて語るためには、さまざまな区別が必要であることは、間違いないようである。

\* H. Koenig (著), 杉岡良彦(訳)『スピリチュアリティは健康をもたらすか 科学的研究にもとづく医療と宗教の関係』(医学書院: 2009), pp.7-18を参照。

## 公開シンポジウムに参加して

武田正文(浄土真宗本願寺派高善寺)

初めて宗教心理学研究会主催のシンポジウムに参加し、Takahashi 先生の話題提供、荒川先生、中尾先生、菅原先生の発表、その後の質疑、終始興奮しながら聞かせて頂きました。今回のシンポジウムについて感想を述べる機会を頂きましたので、臨床心理学を学ぶ浄土真宗本願寺派の僧侶という私自身の立場から、感じたこと考えたことを述べたいと思います。

Takahashi 先生の話題提供からは、スピリチュアリティの概念研究の必要性について考えさせられました。スピリチュアリティが文化や年代、地域差によって、受け取られ方が多様であり、また、定義が曖昧であるだけに誤解を生む危険性があることが分かりました。そして、潜在性と実用性の二面から捉えるスピリチュアリティの概念モ

デルを提示されました。例として、同じ祈るという行動も、人によって宗教的動機もあれば、何かを得るための手段にもなるということを挙げられました。曖昧なスピリチュアリティという概念を二面から捉えることで理解しやすくなり、もっと詳しく聞きたかったところでもあります。

荒川先生のお話にあったスピリチュアリティという言葉に対する違和感、一般の方から捉えるスピリチュアリティと研究者が考えるものとの間にあるズレという点が印象に残りました。私自身も、研究の土台にあるスピリチュアリティをいつの間にか当たり前だと考えていることに気づかされました。改めて宗教心理学研究において自分の価値観や宗教観が強く働いていることを実感し、荒川先生のように別の視点を提供して下さること

が貴重であることを感じました。また「幸せならいいじゃないか」を聞いて、スピリチュアリティという概念のための研究ではなく、日本人に役に立つ、目の前の人に役に立つスピリチュアリティ研究が大切であるということを感じました。

菅原先生のお話は同じ僧侶として共感しやすい面が多々ありました。特に檀家さんから「和尚さん、オーラ見えないの?」という問いに「見えない」と答えてがっかりされるというエピソードは、僧侶が共通して対応に困る場面だと思います。宗教を超えて普遍的な何かを説明するのに、スピリチュアリティ研究は役立つように思いました。僧侶に対するアンケートからは、スピリチュアリティブームに対して肯定否定の両面があるようでしたが、宗教を超えたスピリチュアリティという概念の理解を深めることで、より開かれた仏教にしていけることが可能となるのではないかと思います。

中尾先生のお話は、僧侶として非常に実感がありました。まず、スピリチュアリティは信仰の過程で感得する全てのものであり、念仏や禅、八正道などを通して自ら体験することが仏智の理解につながるのとことでした。さらに、そのうえで、言行一致や生活習慣、周りの人を大切にしている

かといったことから、仏智とのつながりを見極めるといってお話でした。ここでお話されたスピリチュアリティには、体験的に感情的に理解されるスピリチュアリティと、態度や価値観といったパーソナリティに関わるスピリチュアリティがあるかと思いました。仏教の教義や実践をスピリチュアリティという概念によって、様々な視点から考察できる可能性があるのだと考えながら聞かせて頂きました。

以上のようにそれぞれの先生方のお話に大変刺激を受け、もっと聞きたいという気持ちが強くなっていました。これまで、スピリチュアリティに興味があったものの、周囲に宗教心理学を専門とされる方もおらず、自分が何を目指すべきか今一つ定まらないうでした。しかし、シンポジウムに参加して、宗教心理学に様々な立場から真剣に取り組んでおられる先生方が多数おられて、自分もこの一員に加わりたいと思い、出会いの大切さを感じました。

Takahashi 先生を始め発表された先生方、司会の松島先生、参加者の方々とのご縁に感謝いたします。今後ともよろしく申し上げます。

## 日本版スピリチュアリティを考える

永野将司(WCRP:世界宗教者平和会議)

「スピリチュアリティ」というテーマに魅かれて、初めて研究会へ参加させて頂いた。Takahashi 先生をはじめ多くの先生方の貴重な御意見に触れることができ大変意義深い研究会であった。

一口にスピリチュアリティといっても定義は極めて難しいということは研究会で何度も言及された。そこで私は日本におけるスピリチュアリティ、それも一般大衆が受け入れているスピリチュアリティに的を絞って考えを述べていきたいと思う。

大手検索サイト Google で「スピリチュアル」というキーワードを打ち込み、スペースを空けると予測機能により「スピリチュアル」と一緒に検索さ

れることが多い「江原」「カウンセリング」「地震」「求人」「ブログ」といったキーワードが表れる。(2011年7月30日現在、なお日本では「スピリチュアル」という表現を使う機会が多いので「スピリチュアル」で検索をおこなった)

注目すべきは「地震」「求人」というキーワードだ。この「地震」「求人」とスピリチュアリティの関係性をさらに分析していくと、「不安」をスピリチュアリティの力で解決したいと言う意志が伺える。つまり、日本において「スピリチュアリティ」は広い意味での「精神的な支え」として機能していると考えられる。

また、スピリチュアリティブームの火付け役で



ある江原氏が説く「前世」「オーラ」という概念は現在では多くの日本人が受け入れるようになってきている。さらに最近では、スピリチュアリティから派生した「パワースポット」や「パワーストーン」「パワーフード」といった新たなブームも盛り上がっている。「パワースポットに行けばオーラを得ることができる」「パワーストーンを身につければパワーフードを食べればオーラを身につけることができる」といった記事が頻繁に雑誌などでは取り上げているが「パワー～」は端的に述べてしまえば、スピリチュアリティブームに便乗した新たな市場が開拓されたという見解も可能ではないだろうか？

特筆すべきはパワースポットの大半が寺社仏閣などの宗教施設であることだ。日本では特定の宗教を持つことは一般的にタブーとされている。しかし、精神的な支えなしに日本社会を生き抜くことは現実問題として困難な状況である。そのため、本来は宗教が担うべき精神的な支えとして「スピリチュアリティ」が広く受け入れられることになったのは想像に難くない(この傾向は堀江宗正『若者の気分スピリチュアリティのゆくえ』に詳

しい)。

つまり、既存の宗教と新たな精神的な支えでの混合に加え、精神的な支えを求める人々をターゲットにした経済的要因が複雑に絡み合い、それぞれの関係が一層複雑化している。その集大成こそが「日本版スピリチュアリティ」だと私は考える。

「スピリチュアリティ」の詳細な学問的分析は今後さらに積み上げていく必要があるだろうが、「日本版スピリチュアリティ」が少なからず日本人の精神的な支えの1つとなっているのは間違いない。

東北大地震の影響により、日本中が不安を抱えながら生活を送っている。被災者だけではなく、原発の問題、さらには雇用の問題と多くの人々の心が病んでいる。過去10年以上、毎年3万人を超えていた自殺者数が今年さらにも多くなることが予想される。スピリチュアリティが精神的な支えとなり、1人でも多くの命を救うことを願わずにはいられない。

## 公開シンポジウムをめぐる出席とその印象

スティグ・リンダーバーグ(京都大学大学院)

こんにちは。私は京都大学基督教学研究科博士後期課程の院生スティグ・リンダーバーグ(Stig Lindberg)と申します。この度、当会のニューズレターへの初めての投稿であるため、多少の緊張感を覚えながら6月に開かれた公開シンポジウム「宗教とスピリチュアリティ」についての印象を述べさせていただきます。

今回のシンポジウムは初めての参加であったため、構造や内容について、事前に特定のイメージを持っていたわけではありません。ともかくも、当シンポジウムの題材に関心を持つ友人を連れて出席させて頂きました。わたくし自身の出席の目的は、会の題目通り、「宗教心理学」に深い関

心を持っていたことに由来します。とりわけ、人類史の古くからみられる「超越感」と「罪悪感」とが、人間にその応答を求め、結果として代々宗教化(規範化)していくという事象に関心があります。アメリカの著名な学者であったジョセフ・キャンベル(Joseph Campbell)がこの辺りの研究に優れたものでした。

現在は賀川豊彦の思想—とりわけ彼の「宇宙論」ないし「宗教観」—を専門的に研究しております。結局、賀川もまた、時代に先立ち「社会心理学」の研究に励んだ一人でもありました。熱心な宗教家であった賀川は、社会環境ならびに物資の欠如が人間心理をどう左右するのかについて

一心に研究していました。

話を戻しますと、今回のシンポジウムの第一印象を遠慮せずに披歴させて頂くと、今まで体験してきた学会やシンポジウムなどに比べて、出席の人数が少なかったということです。ただ逆にその方が質疑応答には好ましい場合もあるのではないかと思います。次に印象を受けたのは、構造についてのことです。大まかにいうならば学術的な立場と実践的な立場を対峙する形に設定されたのが、とても伝統的でもあり又有意義だったのではないかと思います。しかし、この設定それ自体がいかに伝統的であったとしても、そこにとどまらず、二者の領域を隔てる境界線をどうにか乗り越えて行こうとする必要があるのではないかと感じます。

各々の発表者およびコメンテーターの方々の話を興味深く聞かせていただきました。そしてそ

れぞれがご自分の立場から現在、日本国内のみならず、話題となっている「スピリチュアリティ」について留意すべきところを語って下さったのです。アプローチの問題もあるでしょうが、「スピリチュアリティ」という問題を考える以上、ひとまず語彙( vocabulary )の統一が必要という主張は万場一致だったのではないのでしょうか。

わたくし自身がいわゆる世のいう「宗教家」から自分流の「信心家」( spiritual person )への移行期にあるような気が致します。そういう意味でもこの「宗教心理研究会」に携わらせて頂くことを光栄に思います。最後に、今読んでいる本( Dark Nights of the Soul, Thomas Moore 著 )からの一節を皆様のご検討に預かって頂ければと思います。「 The essence of spirituality is an enlargement of vision...In this, beauty and religion serve similar purposes.」今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

## 事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第15号が発行されました。今回の内容は、2011年6月に開催された公開シンポジウム報告および発表者、参加者からの感想からなっており、「スピリチュアリティ」について様々な角度から論じられています。非常に示唆深い考える内容となっており、今号も中身の濃い読み応えのある内容となっております。ぜひニューズレターに関する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。

また、9月に懇話会、10月に第1回ワーキンググループが開催され、宗教心理学研究会としても新たな一歩を踏み出したように思います。今後も継続的にこれらの活動を行っていきたいと考えております。引き続き、研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。(K.M)

## [宗教心理学研究会の今後の予定]

### 2012年1月

第2回ワーキンググループ(東京開催)

第10回研究発表会(日本心理学会第76回大会ワークショップ) テーマ・発表者の提案・検討  
日本心理学会第76回大会ワークショップ申し込み

### 2012年2月

宗教心理学研究会ニューズレター第16号の構成・編集作業

### 2012年3月

第3回ワーキンググループ(関西開催)

宗教心理学研究会ニューズレター第16号発行(予定)

### 2012年5月

第1回勉強会(東京開催)

発行: 宗教心理学研究会

編集: 宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当: 松島公望 [psychology-religion@office.so-net.ne.jp]

研究会ホームページおよびメーリングリスト管理・運営

担当: 西脇 良 [rnishiwk@nanzan-u.ac.jp]

研究会ホームページ

[http://www.geocities.jp/psychology\\_of\\_religion\\_japan/](http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/)